なども、豆腐のあつものに打あはび取そへ、先祖位牌の前にて盃をめぐらせり、家もやゝ分ひろめて、親類もおほくなれど、皆そのおきてを守て、一族風を成しけるとなん、

〔藝備孝義傳三編廣島四〕國泰寺下男菊松

菊松は父を藤四郎といひて、安藝郡矢野村の民なり、菊松十六歳にして、はじめて國泰寺に仕ふ、當時は國の大地なれば、遍參の僧多く來集りて、日々の費用おびたゞしけれど幹事のものも僧徒なれば、さまで意とするものもなかりしに、菊松この寺に仕へて後は、米薪の出納より味噌醬油のつくりかた、菜圃のことまでも、おのが身に荷ひ、さまゞと意をくばり、節儉をむねとしてはからひけること、三十餘年の久しきにおよびぬれど、廉潔にしていさゝか私なかりければ、寺中のもの皆その實意に感服し、無用の費の減ずるのみか、寺法の法まりともなりけるとぞ、また郷里なる父がうりはらひし家田地をも、己がはたらきをもて、本のごとく買もどし、老父をして心やすく暮させける、

〔千歳のもとい〕儉と吝とは間違ひやすき也、儉は美德、吝は惡德なり、儉とは物を小じめにするを云、心も小じめにせざれば放に成行、身の調度も小じめならざれば奢に流る、書經に位は期せざれども驕ると云は、誰も其始位高くなりなば、たかぶらむと思ふ人もなけれ共、位高くなりて、此心小じめならざれば、いつしか驕慢に成行、富は期せざれ共侈とは、是も始富たらば侈らむとはおもはね共、富にまかせて飲食衣服より、すべて身の調度小じめならざれば、いつかは奢侈に流行を戒し詞也、小じめと云は、物に節度を立てたる事をしり、無用の費をはぶくを云、もし其惠むべく施すべきにのぞみては、一毫も惜むことなく、ほどこしめぐむべきこと也、其施し惠むが爲に、かねて無用を省て、有用を足らする也、

○